

その先生が非常に演劇が好きで、先生の大きな靴を持ってお供してよくみに行きました。

それで一緒にみているうちに映画が好きになりまして、そのうちに何となく、ああいう風にいるような人間を演じられることに魅力を感じ演劇界に入りました。

日活入社

その頃は、今みたいに研究機関というか養成所なんてありませんからね。

京都の撮影所に十日間通いましたよ。ところが春原さんという助監督さんが、この方はとても愛嬌のいい方で、やめとけと言われたんですが、その内やと所長に会わせてもらったんです。

池水さんという所長は、大分県出身の方で、人情所長といわれていたんですがね、「同じ九州出身なら、大変な仕事だけど絶対にやめるなよ」ということで、戦前の日活に入社しました。十九歳の時でした。

入社できたうれしきで、朝早くから出勤してね。だけど給料が二十三円なんです。

いくら物価が安い時代とはいっても、とても足りません。

それで撮影所についておれば、先輩たちが面倒みてくれるわけです。めし食わせたり小遣い銭くれたりしてね。今のスターさんたちは、そういう点ははっきりね。

しておられますけれど昔のスターさんたちは非常によく後輩の面倒をみてくれました。

「ある父」でデビュー

入社して一年間はそういう生活でしたが、高校生の受験をテーマにした武者小路実篤先生の「ある父」というのを、東坊条恭長さんという方が撮られることになったんです。この方は入江たか子さんのお兄さんですが、その少年がいないというわけです。

僕はその頃は着物がなかったものからかすりの着物にはかま、朴歯で行ってしまっていて、それを東坊条さんが見て「あれは何だ、あんなのが俳優部にいるのか。とにかく会ってみよう」ということになりましたね。

それがきっかけなんです。それで割と下積みが短かったのです。

伊沢の坊

僕は先輩諸氏に非常にかわいがられました。京都では若い人を「坊」というんですよ。それで「伊沢の坊」と呼ばれていろいろ使ってくださいました。

伊沢一郎という匿名は、僕は七人兄弟の末子で、父親が「捨男」と役場に出生届を出したんです。それで役場の方が「これではあまりにもかわいそうだ」と

いうことで「末男」にしてくれたんです。この話を聞いて非常に腹が立ちまして、その反発もあって「二郎」としました。長男を味わいたかったわけです。

「伊沢」というのは、筑地小劇場に伊沢蘭香という当時のモダンガールがいて、とてもきれいな方でした。その伊沢をもらったわけです。

五人の斥候兵

現代劇というのは東京で撮らなくてはだめだということで、昭和九年に撮影所が京都から東京に移りました。

その頃から日本の国がおかしくなりまして、それがかえって俳優の僕にとってチャンスになったわけです。「五人の斥候兵」「土と兵隊」「將軍と参謀と兵」といった作品に出演しそれで認めてもらえるようになりましたね。これだけやれるなら今度は大人の役をやらせてみようということになった時、召集がきたんです。

戦争というものが、僕を一人前の俳優にしてくれた、と同時に僕の一番働き盛りの年代をだめにしたわけです。

「五人の斥候兵」「將軍と参謀と兵」といった作品は今でも強烈な印象が残っておりますし、とても忘れることはできません。

「五人の斥候兵」というのは、女優が出演しないからという理由で、最初、公

社は製作を許可しなかったんです。それで製作費が全然ないのを、田坂先生が、この先生は非常に人望の厚い監督さんでしてね、各監督がとっている製作費を少しずつ分けてもらって、それで撮ったんです。

ところができ上がったらバカ当たりしましたね。

「伊沢、お前は戦犯だぞ。お前の見習士官を見て、ずいぶん見習士官になった連中がいるぞ。会社に手紙がいっぱいきてるぞ」と製作部長にいわれました。

あの時代は戦意高揚の映画が多く作られました。が、じっくり味わうと、あの映画は大変な反戦映画だと思います。

阪妻さんのこと

「將軍と参謀と兵」で初めて阪妻さんと共演しました。

その時の阪妻さんというのは恐ろしかったし、立派でしたよ。

普通は、こちらが「お早うございませ」と挨拶すれば「お早よう」と返事してくれるんです。

それで阪妻さんが將軍の衣装をつけてメイキヤップをする時、僕がいつもの調子で「お早うございませ」と挨拶したら、ジロツとにらむんです。

俳優部長が、「そんな挨拶の仕方ではだめだよ。もう將軍になりきっているんだから」というので、直立敬礼して「お

早うございませ。」といったら「ウムお早う」ですよ。

もう將軍なんです。驚きましたね。もうメイキヤップの時に役になりきっているわけです。これが本当なんでしょうね。

大根

失敗も数多くやりました。

「ある父」を撮ってる時、あるシーンでなかなか監督が気に入るような演技ができないわけです。朝の九時からはいって十二時になってもだめなんです。そして監督が「食事によろしく。しなくていいの一人いるけどな」。

電気を消した真暗なセットの中で「役者やめようかな。いやいや自分でやろうと決めた道だらやりにやらん」と思ってたね頭張りましたよ。

又「緑の地平線」という作品で、原節子さんと共演しましたが、浅間山の方へロケに行ったんです。土べいの前に大根がいっぱい干してあって、その前で二人が話すシーンが、どうしてもできないんです。昼頃になって監督が「ええかっこのうだ。大根が大根はさんで。めし食ってる間、お前はそこでじっとしてろ」。結局そのシーンだけで一日かかりましたけれどね。

だけどこのような監督がOK出してく

れたら自分の演技について安心できま

す。今は、その当時に比べて残念ながら撮影にゆっくり時間をかけることができま

働けば涼し

戦前は、熊本県人らしく「清く正しく」をモットーにしていたが、終戦後、はたしてこれだけで世の中が渡って

いけるだろうかという壁にぶつかったりしてしまつた。「働けば涼し」にかえりましたよ。

最近、全部が全部そうではありませんが、年寄りや若者が、世の中に甘んじてると思えます。壮年の人は責任感があるんですよ。家庭に対して、子供を学校にいかせるとか、娘を嫁に出すとかね。だから責任があるから世の中に甘んたれてはいられない。

ところが年寄りは子供を世の中におくつてしまひ、若者はこれがだめなら、あつちというふう

に製作を許可しなかったんです。それで製作費が全然ないのを、田坂先生が、この先生は非常に人望の厚い監督さんでしてね、各監督がとっている製作費を少しずつ分けてもらって、それで撮ったんです。

ところができ上がったらバカ当たりしましたね。

「伊沢、お前は戦犯だぞ。お前の見習士官を見て、ずいぶん見習士官になった連中がいるぞ。会社に手紙がいっぱいきてるぞ」と製作部長にいわれました。

あの時代は戦意高揚の映画が多く作られました。が、じっくり味わうと、あの映画は大変な反戦映画だと思います。

阪妻さんのこと

「將軍と参謀と兵」で初めて阪妻さんと共演しました。

その時の阪妻さんというのは恐ろしかったし、立派でしたよ。

普通は、こちらが「お早うございませ」と挨拶すれば「お早よう」と返事してくれるんです。

それで阪妻さんが將軍の衣装をつけてメイキヤップをする時、僕がいつもの調子で「お早うございませ」と挨拶したら、ジロツとにらむんです。

俳優部長が、「そんな挨拶の仕方ではだめだよ。もう將軍になりきっているんだから」というので、直立敬礼して「お

年やっております。ずいぶん各地に口ケしましたが、ちょっとしと思いつきで珍しい民芸品があるんです。

僕のおふるさとの菊池にも竹がたくさんあるんですよ。これなんかも利用して竹細工でもつくればね。竹というのは火の

いれ方でいろいろできるんですよ。日本には数多くのお城がありますが、やはり熊本城が一番ですよ。独特の武者返しもありますしね。

もう十年以上も熊本には帰っておりませんが、僕の子供の頃のふるさとの姿が残っていると思えます。

僕は京都の仕事が多くてよく行きますが、僕も熊本の人間ですからよく飲むんですよ。

南禅寺という、とてもいい所があるんですが、目の前に大きなホテルが建ちましてね。

建てて悪いとはいわないが、建てる場所による。こわされてしまっているんですよ。こう感じるの僕一人じゃないと思います。熊本城の近辺というのは、本

当にそつとやってもらいたいですね。それから阿蘇山ほど雄大なものはありません。雄大であり、また容姿がとてもいいですね。こういった観光資源を大切にしてもらいたいですね。